

セッション責任者	リンジー・モリソン (Lindsay Morrison)、 フリアナ・ブリティカ・アルサテ (Juliana Buritica-Alzate)
セッション名	「おぞましき女性の行方—フェミニズム批評から読む日本神話および昔話—」
趣旨	<p>本パネルは、日本昔話と神話において棄却された女がどのように語られ、また、現代作家によってどのように語り直されているかについて、フェミニズムの観点から批判的に分析を試みる。</p> <p>神話と昔話は、それらを語り継ぐ文化の世界観や信仰などを反映するし、人間存在の根本的な課題やモチーフを表す一方、ジェンダー差別のような社会問題をも明らかにする。なぜなら、神話や昔話は文化の価値観を継承させるためだけではなく、女性抑圧のような社会規範を正当化するためにも、永きに渡って伝承されてきたからである。そのため、聞き慣れた昔話と神話を批判的に読み直す必要があるだろう。本パネルは日本神話と昔話——その原文と現代作家によって語り直された作品を、フェミニズムの観点から再考し、家父長的な要素を脱構築する。</p> <p>「暗い女の極み —日本昔話の「蛇女房」におけるおぞましき女性像をめぐる—</p> <p>リンジー・モリソンの発表では、日本の異類婚姻譚の一つである「蛇女房」を検討する。日本では異類女房がおぞましい存在として描かれる反面、男性の欲望や憧憬の対象としても描写されることが多い。本発表では、蛇の息子による母への憧憬が、母の棄却（アブジェクション）に依拠していることをフェミニズム批評や精神分析の観点から考察する。また、「蛇女房」と『古事記』における「妣国」との関連性についても論じる。</p> <p>「神話の復習と女性の復讐 —桐野夏生の『女神記』をフェミニズムから読む—</p> <p>フリアナ・ブリティカ・アルサテの発表は、神話における女性の復讐について考察する。桐野夏生の『女神記』（2008年）において、イザナギとイザナミの神話がどのように語り直され、また、どのように虐待や裏切りの被害者が自分の声を取り戻していくかを明確にする。黄泉国の女神イザナミと『女神記』に登場する語り手であるナミマとの関係を検討し、いかに女性のセクシュアリティや出産をめぐる歴史的な沈黙が非難され、修復されているかを追求する。</p> <p>フリアナ・ブリティカ・アルサテの発表は、神話における女性の復讐について考察する。桐野夏生の『女神記』（2008年）において、イザナギとイザナミの神話がどのように語り直され、また、どのように虐待や裏切りの被害者が自分の声を取り戻していくかを明確にする。黄泉国の女神イザナミと『女神記』に登場する語り手であるナミマとの関係を検討し、いかに女性のセクシュアリティや出産をめぐる歴史的な沈黙が非難され、修復されているかを追求する。</p>

発表者、討論者、座長など	発表者： リンジー・モリソン (武蔵大学人文学部英語英米文化学科助教) フリアナ・ブリティカ・アルサテ (国際基督教大学ジェンダー研究センター研究所助手) 討論者： レティシァ・グアリーニ (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科) シュテファン・ヴェーラー (東京大学大学院総合文化研究科) 司会： 張 桂娥 (東呉大学日本語文学系副教授)
--------------	--